

第二次世界大戦の傷跡も癒えず、国民の生活は困窮の直中にあつた時、大戦後の米ソ冷戦、対立は高まり、アメリカは極東における地位の強化を企っていた。昭和二十四年十月中華人民共和国の成立により、中国においての足場を失つたアメリカにとって、韓国は重要な橋頭堡であつたが、アメリカの推す李承晩政権は、同二十五年五月の総選挙で敗北。民族統一の機運も高まつたが、同年六月二十五日南北両軍の武力衝突が起き、朝鮮戦争の勃発となつた。

朝鮮戦争は、極東での日本の軍事的役割を決定的なものにし、一方で戦後経済を復興させる特需景気を抛んだ。

在日米軍の駐留する横田基地をかかえる福生でも、戦後の町の発展への大きな契機となつた。

作家川端康成は、ちょうどこの時期（昭和二十六年八月から二十七年五月）の福生と、都心の下町（小説の中ではN町としている）を舞台とした、長編小説『川のある下町の話』を書き残してしまふ。

## 川端康成

### 『川のある下町の話』

#### 菅井憲一

この小説は、昭和二十八年一月から十二月迄、雑誌「婦人画報」に連載された。正月号の後の新春特別号にも連載されたので計十三回で完結しました。

主な登場人物は、インターン中の医学生栗田義三（二十三歳）、義三に思いを寄せる同じ大学を出た医学生井上民子、義三の従妹である医師の娘千葉桃子（十七歳）、不思議な魅力のある目を持つ薄幸な少女吉本ふさ子（十七歳）、ふさ子の友人である伸子（二十歳）、かな子（十七歳）の姉妹、キャバレーのボーイ達吉などです。

内容は千葉家からの援助を受けながら医師をめざす義三と身寄りのない少女ふ

さ子をめぐる悲劇的な愛の物語りです。義三はN町の病院でインターンをしてゐる時、増水した川に落ちたふさ子の弟和男（四歳）を目にし、飛込んで助け救います。それがきっかけでふさ子と出会うのですが、和男はその年の十二月、冬の真中肺炎を起し、義三の懸命の治療のいかにも無く、手遅れとなつて死に、ふさ子は天涯孤独の身となります。

ふさ子は病院の近くの空地のバラックに、伸子、かな子らと軒を並べて住んでいたのですが、その場所は、やがて長野県のK駅近くに疎開していた桃子の父の手による千葉病院が建つこととなり、追われる身となります。

桃子は義三を慕っていますが、義三のふさ子に対する感情を理解し、けなげにも間に立ち、二人の愛を見守ろうとします。

ふさ子は義三に引かれるものを感じながら、自分の境遇と余り違う義三に對し、将来を考え、自分の立場を省みて、気持ちを抑えています。千葉病院建設によつて行き所を失ひ、今迄玉売りをしていたパチンコ店に置いてもらふことにな

# 文学の中の福生 1

りましたが、バチンコ店の息子に言い寄せられ、いたたまれず逃げ出し、思い余って義三の下宿先の寮を尋ねます。

ところが二日後、寮でふさ子が義三にあずけていた大金の立ち退き料が盗まれ、事件の広がり苦慮したふさ子は、義三の帰りを待たず寮を出ることにしました。行く先は以前一度行ったことのある、伸子、かな子の姉妹の立ち退き先の福生という町でした。伸子、かな子は福生でキヤバレー・チェリイの女給として働いていました。

小説で福生はこの様に描かれています。新宿駅で立川行き中央線に乗りかえた。隣りの姉妹が移って行った、福生という町をたずねてみるつもりだった。(中略)立川で切符を買ひ改めて、青梅線のホームで電車を待っていると、ふさ子は遠くへゆくように思われた。目の前の大きな看板は、奥多摩山岳地方の案内図だった。

福生は立川から七つ目の駅だった。三輛連結のどの電車にも、アメリカ人が四五人は乗っていた。プウドルというショウト・ヘヤアで、けばけばし

い洋装の女が自分と同じくらい年ごろなので、ふさ子は目をひかれた。

(中略)

福生でおりました時は、冬の暮れ早い日ざしが、うす暗く寒かった。

秩父や多摩の山々が雪を見せて、町をつつんでいるようだった。(中略)

福生新町、ウエルカム——と町の入口の上に、英語のアアチがつつてあって冷たい北風に、かたかたとわびしい音を立てていた。

竜や桜を刺繍した繻子のガウン、イミテエションの首飾り、そんなものをおいた、スウヴニール・ショップが右側に二軒ならび、左側には、黄色に塗った酒場、青い酒場、錆色の酒場がつづき、みな木造の箱みたいな店で、酒場と酒場のあいだは空地、裏は見渡す畑地、その向うには、いま空の色と暗くとけ合おうとしている、きびしい山脈があった。(中略)

坂の上に赤い塔が見え、桜の花型にネオンがついていた。伸子やかな子が踊る、キャバレー・チェリイだった。ふさ子は胸がどきどきするよううで、

「どんな人が踊りに来るの?」  
「そりゃ、みんな将校ばかりよ。」

「いやなことはないの?」

「いやなことはないわ。チェリイは一番上品だし、ほかには柄の悪いところもあるらしいけれど、私たちは踊りの相手をすだけよ。九時ごろになると、東京からステイジ・ダンサーが来るのよ。アクロバットやストリップや……。」

と、伸子が言うと、かな子がつけ加えた。

「歩合をもらうだけで、贅沢な生活は出来ないけれど、暮していけないこともないわ。どう、ふさちゃんも福生に来たら……? フサにフッサじゃないの。本名のままで、ミス・フッサになれるわ。フッサは福が生れると書くから……。」

(注・これは最初に福生を尋ねた時のものです)

やっとの思いで福生にたどり着いたふさ子は伸子、かな子の親切をうけ、しばし二人の住む借家に置いてもらい、キャ

パレー・チエリイで働くことを決心します。

チエリイには、義三によく似たやぐぎなボーイの達吉がいました。働き始めてしばらくたったある日、ふさ子は帰りがけに、米兵の乗ったジープに引きづり込まれます。走るジープから必死で逃がれようとするふさ子を助けたのが達吉でした。達吉はオートバイでジープを追いかけてきて、体当りをして止め、ふさ子を救いました。しかし達吉は、その時に受けた額の傷から破傷風にかかり、間もなく命を落します。多くの女に手をかけた達吉でしたが、ふさ子に示した行為は、愛情からほとぼり出たもので、ふさ子も達吉に対し愛を覚えたのでした。運命のいたずらにはつかの間の二人の心を永遠に引き裂いてしまったのです。

弟和男の死からわずか三月の間に達吉の死を見たふさ子は、余りの運命に自分には愛するものを死にやってしまうのではないかとという強迫観念に囚われ、義三への思いを胸深くいだいたまま気が触れてしまします。義三に一目会いたい一心で福生を出たふさ子は、歩いてN町へ向う

のでした。

この後、ふさ子と義三の愛は実ることなく小説は終章となります。

最後にこの小説について考えてみましょう。川端康成が『川のある下町の話』を書くに至った動機については、現在入手が出来る、新潮文庫本(昭和三十三年初版)、角川文庫本(昭和三十三年初版・現在絶版)のあとがき、解説にも記述はありませんが、筆者の推測では、朝鮮動乱を報道するマスコミに、基地の町福生が登場したことが、契機の一つになっていると思われまます。それは、主人公の名ふさ子が、福生という町の名の響きから命名されていることから伺えます。戦争が自国だけでなく、他国の名もな

い人々を不幸に陥れることを身を以って体験した日本が、再び朝鮮戦争によってその過ちを繰り返すことになりはしないかという恐れを感悟したのではないのでしょうか。

弟和男の死、達吉の死、そして伸子、かな子の兄の死が書かれています。愛と死がとなり合わせであることを、幸と不幸が一体であることを読者は読みとることが出来るでしょう。作品の背景には朝鮮戦争を目の前にして、運命として先の戦争に臨まねばならなかった国民に対する危惧と同情があります。

もう一つ注目すべきことは、具体的地名として描かれている福生の町の当時の世相を的確に写し取っていることです。おそらく福生の地を実際に訪れ、作品のイメージを確かなものにしたと思われまます。基地の町福生の描写の中に、そこに生きる薄運な人々を愛情を込めて書き綴っていることが印象深く残りました。

小説が発表されるとすぐに大映からの交渉があり、昭和三十年一月、衣笠貞之助監督のメガホンにより、ふさ子に有馬稲子、民子に山本富士子、義三に根上淳、桃子に新人、川上康子を起用し、タイトルもそのままに、映画化されました。小説も映画も時代の共感をもって読まれ、鑑賞されたことでしょう。

(すがい・けんいち 福生市史近代調査員)